

ポルト大学滞在記

木村 昌弘
Masahiro KIMURA

先端理工学部電子情報通信課程 教授

Professor, Electronics, Information and Communication Engineering Course



1. はじめに

2019年4月から2020年3月まで国外研究員として、ポルトガルのポルト大学（University of Porto）にあるLIAAD（Laboratory of Artificial Intelligence and Decision Support）に滞在しました。LIAADは、ポルト大学の理学部、工学部、経済学部だけでなく、INESC TEC（Institute for Systems and Computer Engineering, Technology and Science）という組織にも属しています。INESC TECはイネエスックという感じで発音されますが、日本で言うと産業技術総合研究所や理化学研究所のような組織で、ポルトガルの情報技術を背負っている感じがありました。私がお世話になったのはJoão Gama教授で、人工知能研究分野では有名な方です。欧米ではファーストネームで呼び合うことが多いですが、彼は私をマサヒロまたはマサと呼んでくれ、私は彼のことをジョアンという感じで呼んでいましたので、本稿でも親しみをこめて彼をジョアンと呼ぶことにします。

さて、この原稿を書いているのは2021年の2月末です。帰国してもうすぐ1年が経過しようとしています。2020年度は、先端理工学部ができて新たな授業が始まったり、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が蔓延して授業がオンラインになった



写真1 ポルト大学本部棟

り等、いろいろとたいへんなことがありました。しばらく時間が過ぎましたが、ポルト大学滞在時のことについて、できるだけ簡潔に述べさせていただきたいと思います。もっと詳しい話が聞きたいと仰ってくださる方は、私の研究室まで来てください。お茶でも飲みながらゆっくり話をさせていただきます。それでは当時の思い出について、記憶が最も鮮明であるCOVID-19問題が深刻化し帰国の準備をするあたりから話を始めたいと思います。

2. COVID-19問題と帰国

ポルト大学は、ポルトガル第2の都市ポルトにある国立の総合大学です。私は、子供達の学校のことがあるので、家族を日本に残してポルト大学に単身赴任しました。私が住んでいたのはマイアという街

のアパートで、ジョアンの家にも歩いて行けるころでした。私が単身赴任だったということもあり、ジョアンは何度も私を彼の家に招待してくれ、夕食をごちそうしてくれました。彼のご家族は、奥様、ご長男、ご長女、それに奥様のお母様であり、ポルトガルの家庭料理をごちそうになりながら、ご家族のみなさんにポルトの観光名所や生活様式等について教えてもらいました。私は、自分では大した料理を作ることができないので、帰国間近の3月はじめに、ジョアンのご家族をレストランに招待しステーキ等をごちそうしました。そしてその日に、ポルトガルで最初の COVID-19 感染者が確認されました。

日本では1月下旬くらいから COVID-19 が問題になっていることを、日本にいる妻から聞いて知っていましたが、観光都市であるポルトでは、多くの外国人観光客も来ていたし、まだ誰もそれを深刻に受け止めていないようでした。マスクをしている人は、まったくと言ってよいくらい見かけませんでした。私も、関係ないと思っていました。しかし、事態は急変します。3月中旬になると、スーパーマーケットも入場者数制限がなされ、並んでやっと入れるという状況になりました。そして、帰国のために予約していた航空機の便が、欠航になったというメールが来ました。別の便に変更してもらおうと電話をかけてもまったくつながらず、ほんとうに1日かけてやっとの思いで代りの航空券を取得しました。航空券を印刷する必要があったので、いつもの通勤バスで LIAAD まで行きましたが、そのころにはすでにテレワークが導入され、LIAAD には知っている人はもう誰も来ていませんでした。また、そのバスは、運転手と乗客の間がビニールテープのようなもので完全に仕切られた状態で運賃も無料だし、マスクでなくて布切れのようなもので口元を覆っている人達がたくさんいて、不気味な雰囲気でした。それでも私は、帰国の航空券が手元にあるので高を括っていました。しかし、EU が圏外からの入国禁止措置をとるというニュースを見て、「早く帰国しないと、帰るのが困難になるかもしれない」と

いう不安にかられました。龍谷大学理工学部からも、早期帰国を促すメールをいただきました。私は、やっと手に入れた代りの航空券を捨てて、できるだけ早く帰国できる航空券を新たに予約しようと決断しました。電話予約はもう無理だとすでに悟っていたので、ANA の会員になり会員特典で予約し、3日後にポルトを出発して帰国することにしました。もちろん、帰国便の航空運賃は元の往復便の総額よりもずっと高額でした。

ポルト空港を出発するのが早朝の午前6時で午前4時には空港に着く必要があったので、その前日はジョアンに車で送ってもらい空港近くのホテルに宿泊しました。出発日の2020年3月19日からポルトガル全土でロックダウンが開始されるので、出発前夜、ジョアンは「航空機が飛ばないときには、連絡したら迎えに行つてあげるよ」と言ってくれ、私はこれまでのお礼を言いそこで彼とさよならをしました。出発当日、搭乗口まではスムーズに行けましたが、予定の時刻になっても搭乗が始まりません。早朝で外はまだ真っ暗のせいか、航空機らしきものも見えません。空港スタッフどうしがポルトガル語で何やら相談しているし、乗客達もざわざわして落ち着かない様子です。何を言っているのかわからないので、不安がよぎりました。しかし、幸いにもそれは杞憂に終わりました。搭乗する航空機のポルト空港への到着が少し遅れただけでのことでした。私は、搭乗した航空機がポルト空港を飛び立ったとき、寂しいけどやれやれと感じたことを覚えています。しかし機内では、提供された飲食物をまったく貰わないような乗客達もいる等、緊張感もありました。フランクフルト空港に着き EU の出国審査を終えて ANA 羽田行きの搭乗口まで行ったとき、久しぶりに多くの日本人を見ました。帰国便の機内では、機長が日本語で「安心してください」というような事を放送され、CAの方々にも安心感があり、私はようやく安堵したことを今でも記憶しています。羽田空港に到着して、妻に電話し、ジョアンにもメールしました。そして、「やはり日本は安心だ

なあ」と感じました。また、ポルトでの生活については、何か長い夢でも見ていたような感じもしました。無事にヨーロッパから日本に連れて帰ってくださった航空会社の方々が、COVID-19問題が長期化して困難な状況にあるというのは心苦しいかぎりです。早くCOVID-19問題が解決され、以前のような世界が戻ってくることを切望します。

3. LIAAD での研究生活

帰国して龍谷大学での授業や研究等が再開し、基本的には渡欧前と同様ないつもの多忙な生活になりました。ポルト大学滞在時のゆったりとした生活が、ありがたいものであったことを再認識するとともに、また懐かしく想い出されます。では次に、LIAAD での研究生活についてお話ししたいと思います。

前述のように、私はマイアのアパートに住み、バスで通勤していました。ポルトでは、スマホに専用アプリをインストールすると、バス停にあと何分でバスが来るかを知らせてくれます。このように書くときとすごく進んだ都市という感じがしますが、実際は「あと1分でバスが到着」というメッセージが最悪だと1時間くらい続くこともありました。日本だったら、ものすごい数の苦情がきて、もしかしたら裁判沙汰にまでなるかもしれませんが、ポルトの人達はそのくらいことはあまり気にしない様子でした。日本でもそうかもしれませんが、この時刻のバスはよく遅れるが、この時刻のバスはだいたい決まった時刻に来るという法則性がありました。私はそれを発見し、だいたいいつも、同じ時刻のバスで大学に行き、また同じ時刻のバスでアパートに帰るという生活をしていました。夏だと夜9時くらいまで明るいので、まだ陽が高いのに帰りのバスに乗っているという感じで、私としては少し後ろめたい気持ちがありました。バスの定期は毎月買わないといけませんでしたが、定期の発売期間が予め決められているので、それを買うには通常長い行列を並ばないといけませんでしたが。私は、ポルト大学近くのバスセン



写真2 ポルト大学構内の INESC TEC

ターだと、朝早くは定期売り場がそれほど混んでいないことを発見し、定期を買うときはいつもよりも早いバスに乗って行きました。

LIAAD は、ポルト大学構内の INESC TEC ビルの2階にありました。0階から始まるので、日本風に言えば3階にありました。ビルに入ると受付の人がいるのですが、1か月もたたない間に顔パスとなり、私が行くといつも笑顔でオフィスの鍵を手渡してくれました。私のオフィスには、専任研究員のリカルド、私のように海外から期限つきで来ている訪問研究員のセリとグスタボ、ポルトガルの別の大学の教授（数回しか会わなかったため、名前を忘れてしまいました）、そして私を含めて合計5人の席がありました。朝は私がオフィスに1番早くに行くことが多かったため、だいたい鍵は私が受付でもらって開けていました。LIAAD メンバーのことは Liaadian と呼ばれていましたが、Liaadian の名前は親しみを込めて、本稿でも当地でのようにファーストネーム的に呼びたいと思います。

オフィスでは、私はリカルドと2人であるということが多かったです。リカルドはすごく研究を頑張っているように見え、好ましい感じがしました。彼は瞑想に興味があるらしく、日本の密教について質問されたことがありました。密教についてはインターネットのホームページで高野山での修行風景の写真を見せてあげ、密教は仏教の一派であり龍谷大学は仏教系の大学だと言うと、私に関心を示してくれたようでした。また、LIAAD センター長のアリピオにも、龍谷大学は浄土真宗という日本で最大の



写真3 LIAAD セミナーでの研究発表の風景

仏教宗派に関係した大学だということをお話したのですが、先端の科学技術を研究する私立の仏教系大学が存在するということに興味をもったようでした。国際舞台で龍谷大学先端理工学部をアピールするポイントの1つとして、仏教という軸はあり得るようにも感じました。

ジョアンの紹介で、彼が指導しているポルト大学大学院工学研究科博士課程の社会人学生マリオと共同研究することになりました。マリオは、ポルトガルの有名なIT企業に勤めていましたがマイアに住んでいたため、都合の良い土曜日にジョアンといっしょに私のアパートにやって来ました。そして私達は、私のアパートでソーシャルネットワーク分析に関するテーマの共同研究を行いました。その研究成果は論文としてすでに出版されていますので、内容についてはここでは割愛させていただきます。ジョアンは多忙だし、マリオの奥様は看護師をされていて休みが不確定みたいだし、またお子さんは少年サッカーを頑張っていたので、なかなか都合が合わなかったのですが、成果を論文としてまとめることができ、たいへん良かったと思っています。

私の研究については、LIAAD セミナーやポルト大学理学部コンピュータ科学科セミナーで発表させていただきました。ポルト大学はポルト市内に3つのキャンパスをもち、理学部は INESC TEC とは別キャンパスにありました。また、理学部の各学科は別々の建物になっていました。セミナーの案内はポルトガル語で書かれた各組織のホームページにも掲



写真4 ポルト大学理学部コンピュータ科学科

載されたので、これらの発表機会を通じて、何人かの研究者と新たに知り合うこともできました。そういう研究者の1人とは、ちょっと印象的だった別の仕事場で再会するということがありました。ジョアンがポルト大学経済学部教授でもあるため、彼が指導していた経済学研究科学生の修士論文の審査員(Jury)をするという機会がありました。彼女はLIAADの学生でもあり伝統的な経済学というよりもデータサイエンス分野の研究をしていたので、私が審査員でもよかったのだと思います。さて、そのときの経済学研究科修士論文の審査員長がマリアで、彼女は私の発表を聴講してくれていました。意外なところでの再会でした。そしてその修士論文審査会(Master Defense)が、龍谷大学大学院理工学研究科等での修士論文公聴会とはだいぶ様子が異なっていて、ちょっと印象的でした。まず、それは博士論文審査会と同様な感じで1人ずつ行われました。審査員達は修論発表者とあいさつをしてから審査会場に入りましたが、会場には発表者のご家族も来られており、ご家族ともあいさつをしました。ここで、あいさつについてですが、女性とのあいさつはチークキスというのをします。下手に恥ずかしくてやらないと失礼ともとられるので、頑張りました。発表者とそのお母様と妹さんとはチークキス、そしてそのお父様とは握手をしました。また、発表後には質疑応答による審査が行われるのですが、審査員達は壇上に並んで座り、審査される発表者は壇を降り会場の前列に立って質問に答えます。厳粛な雰囲気でした。その学生はたいへん優秀だっ



写真5 親切にしてくれた Liaadian 達



写真6 LIAAD があるポルト大学キャンパス

たので、本審査会ではマリアもジョアンも私も満点をつけました。

LIAAD には、ポスドク（博士研究員）や博士課程の学生が何人もいました。スペインから来ていたポスドクのブライスとブラジルから来ていた博士課程学生のティアゴは、私を毎日ランチに誘ってくれました。そして、彼らを含む数人の Liaadian 達とランチを楽しみました。キャンパス内には、ピュッフェ形式でランチを食べられるような少し値段の高いレストランもありましたが、歩いてすぐに行けて値段も手ごろな食堂が2つあり、通常はそれらのどちらかに行っていました。1つは INESC TEC の食堂で、もう1つは工学部の食堂でした。どちらかと言うと、前者の方が社会人向きで後者の方が学生向きという感じです。ランチ後はキャンパス内を散歩し、外でコーヒーを飲みながら談笑するというのが日課でした。ポルトで出会った人の多くは、非常に濃い少量のエスプレッソに砂糖を2袋くらい入れて飲みます。マクドナルドでも普通にコーヒーを注文したら、これができます。私は、コーヒーを注文するときはいつも、「薄いアメリカンコーヒーを砂糖もミルクもなしでください」と大きな声で言っていました。月に2回くらいは、みんなでキャンパス近くのレストランでステーキ等を食べに行ったり、また、車に乗せてもらって少し遠くまでお寿司等を食べに行ったりもしました。彼らはお話が大好きなようで、そういう時だともうランチがなかなか終わりませんでした。また、最初は信じられませんでした。お誕生日の人がいるとその人が、みんなをレ

ストランに招待してごちそうしてくれるということがありました。博士課程学生のソニアが、誕生日なのでケーキを焼いたからみんなといっしょに食べましょうと、わざわざ私のオフィスまで誘いに来てくれたということもありました。私は、お誕生日の人に奢ってもらうというのにどうも気が引けたのですが、どうやら多くの西洋諸国の習慣みたいです。それはそうとして、日本から来た私に対し、Liaadian 達はとても親切でフレンドリーに接してくれました。

4. ポルトでの生活

ポルトはポルトガル北部にあり、大西洋に面した港湾都市です。夏でも涼しく冬でも暖かくて、年中あまり大きく気温が変わらないところです。夏には雨がほとんど降らず、冬には雨がよく降ります。私のアパートにはエアコンがなかったのですが、窓を開けて日除けを下せば、夏の日中でもちょっと暑いと感じるくらいで過ごすことができました。ポルト大学においてさえ、夏にエアコンがつけられた日はそんなに多くありませんでした。私は、夏でも夜には窓を閉め布団を被って寝ていました。ポルトの多くの家には暖炉があるみたいで、冬になるとスーパーマーケットでは暖炉用の薪が売り出され、多くの人達がそれを車で買いに来ていました。私のアパートにはセントラルヒーティングが備わっていたので、冬にはそれを利用していました。しかし、私からすればポルトの冬はそれほど寒くはなく、日本から持って行ったダウンコートは暑いのですぐに着



写真7 ドウロ川沿いのポルトの街

るのをやめ、春と秋に着ていたジャケットに変えましたし、アパートで断熱性も高いので、夜に寝るときにはセントラルヒーティングを消して夏と同じ布団を被っていました。実を言うと、最初は冬用の分厚い布団を被っていたのですが、寝ていて暑かったので変えたのです。ポルトは、気候の観点において過ごしやすいところだと思いました。

ドウロ川沿いに開けた美しい都市であるポルトには、多くの観光名所とともに、ワインや新鮮な魚介類や様々な美味しい料理がたくさんあり、世界中から多くの観光客が訪れます。それらについては、詳しく紹介されている観光ガイドブックがいくつもあるので、本稿では特に触れないことにします。また、ポルトにはFCポルトという有名なサッカーチームがあり、サッカー日本代表MFだった中島選手が在籍していました。サッカーはポルトで最も人気のあるスポーツであり、ポルトに住む多くの人達がFCポルトを熱烈に応援していました。私としては、このように素敵な都市で国外研究員生活を過ごせたことをありがたく思っています。

私が取得したビザは有効期限が1年のもので、東京のポルトガル大使館によれば、ポルトガル入国後に外国人移民局(SEF)に行く必要があるとのことでした。SEFには予約して行ったのですが、恐ろしい数の人達が並んでいて何時間も待たされました。この体験が、後にCOVID-19問題が発生したとき、帰国時期が遅れる場合に対する私の不安要因の1つになりました。日本からポルトへ出発する時、妻が、荷物は持っていくのがたいへんそうだが

ら後で送ってあげると言ってくれたのですが、私は、なんとかなるからと言い2つのスーツケースを持ってポルトへと出発しました。しかし後から振り返ると、これがほぼ最良の選択だったということがわかりました。妻が日本から手紙や日用品等をポルトにいる私に送ってくれたのですが、手紙以外の物は届きませんでした。郵便局(CTT)からは、小包を受け取りたいければ書類を提出せよと言ってきたので、早速、近所のCTTに出向いて必要書類を提出しました。対応してくれたCTTの人達はたいへん親切でした。小包はリスボンの税関にあるみたいでしたが、近いうちに配達してくれそうな感じがしました。しかし、いくら待っても何も言ってきてくれません。私では埒が明かないので、ジョアンにお願いしてリスボンにある税関に電話で状況を尋ねてもらいました。電話はなかなかつながりませんでした。ジョアンによると、もう少ししたら配達してくれるみたいとのことでした。しかし、3か月後くらいだったでしょうか、日本にいる妻のもとに送り返されていました。別の小包を送ってもらったときも、やはり結果は同じでした。どうやら書類不備などではなく、EU諸国とポルトガル語を話す国であるブラジル等以外からは、個人宛の小包はほぼ届かないか、または高い税金をとられるかというような感じだそうです。このことも、後にCOVID-19問題が発生したとき、帰国時期が遅れることに対する私の不安要因でした。さらに、お金の問題にも不安要因がありました。ポルトでは、大きなスーパーマーケット等ではクレジットカードが利用できますが、大学の食堂や住んでいた街の普通のレストラン等ではクレジットカードが使えないので、現金を引き出すことが容易な銀行口座が必要でした。また、アパートの家賃の支払いのためには、ポルトガルの銀行に容易に振り込みができることも重要でした。しかし、日本の銀行はポルトガルでは極めて不便です。ポルトガルの銀行口座を開くにはNIFという納税者番号が必要なのですが、私はポルトガルでお金を稼がないし、ジョアンのご家族によれば私が

NIF を取得するのはたいへん面倒だそうなので、結局、取得しませんでした。代わりに、基本的にはヨーロッパのみで利用可能なインターネット銀行の口座を開きましたが、それほど多くのお金をその口座に預けていませんでした。ポルトにいながら、これをうまく制御するのは簡単ではありません。ポルトは、日本から遠いところだと実感しました。

ところで、ポルトで日本人にお会いするという機会もありました。大晦日の夜、ポルト大学理学部コンピュータ科学科教授のペドロさんのお家に招待していただきました。ペドロさんの奥様は日本人でした。また私以外にも、ポルトで日本料理店をされている方のご家族（みなさん日本人）も招かれています。帰国後に私は、NHK の世界はほしいモノであふれている「ポルトガル幸せお魚パラダイス」を見ていたら、この方がポルトのお店から出演されていたので驚きました。きっと有名なお店なのでしょう。その大晦日の夜は日本語で会話することができたので、ペドロではなくペドロさんと呼んでいました。ペドロさんは日本の統計数理研究所と東京大学に滞在されたことがあり、その時に奥様と知り合われたようで、私がポルト大学理学部コンピュータ科学科セミナーで行った研究発表を聴講してくれました。私はせっかくの機会なので、ここでお会いした日本人の方々に日本からポルトへの小包の郵送に関して質問してみました。みなさんが言うには、日本にあるモノについては、日本から送ってもらってもダメで、日本に帰国したときに手荷物としてポルトへ持って来るとのことでした。もっと早くにお会いしておけば、無駄なことをしなくてよかったですと思いました。ポルトガルはまだ経済力が強くないので、おそらく自国を保護するためにそのような対応をとっているのではと推測されます。みなさんは、ポルトは住みやすくて好きなので、ここで暮らして

いるのだとおっしゃっていました。マトジーニョスという大西洋の海岸通り近くのおしゃれな街にお住まいでした。このあたりは2階建てバスが走り、素敵なレストランやお店が並んでいます。

私が暮らしていたマイアも、安全できれいで物価の安い住みやすい街でした。スーパーマーケットでワインやウイスキーを買うと日本とは1桁くらい値段が違いました。また、マイアの人達は日本から来た私にフレンドリーに接してくれました。行きつけのレストランやスーパーマーケットそして住んでいたアパートでも、みなさんが私に親切にしてくれました。

5. おわりに

ポルト滞在中には、電子情報通信課程の先生にご尽力いただいて、毎週、ポルトガルの早朝で日本の夕方に、龍谷大学に残して来た大学院生達と Google ハングアウトを使ってオンラインゼミをやりました。帰国しても COVID-19 のため、ほとんどのゼミをマイクロソフト Teams のビデオ会議により行ったことを考えると、私達は世間よりも一歩早くオンライン会議を本格的に実践していたことになり、不思議な気持ちになります。今後、その有用性からオンライン授業が広がっていくことが予想されます。

長い時間、集中して物事をゆっくり考えることができたということが、研究者としては最もありがたいことでした。1年間の国外研究員という機会を与えてくださった皆様、ジョアンをはじめポルトでお世話になった皆様、そして私のポルト滞在を日本からサポートしていただいた皆様に、心から感謝いたします。たいへん貴重な体験でした。この体験を活かして、今後の教育および研究に勤めたいと思います。ありがとうございました。

